

- 01 刻まれる職人の呼吸
- 02 特集 漆 伝統と文化の源泉
- 10 永年の功績を称えて
- 11 にのへエコチャレンジ
- 12 二戸トピックス
- 15 News & Information
- 18 減塩レシピ
頑張れガボン
- 19 きらり！明日の風
～中田悠さん～
ぼうさいナビ
- 20 こしゃーる、図書館情報
- 21 ちいさな美術館
にのへの先人
- 22 こみゅに Tea たいむ
ザンビアの風便り
- 23 慶弔、休日当番医など
- 24 公民館からのお知らせ
- 25 二戸市民文士劇
- 30 二戸市文化祭
- 32 楽天イーグルスジュニア
ドリームカップ



(新酒しこみ)

亀磨くんイラスト：きり光乗

特集

漆 伝統と文化の源泉

文化庁は平成27年、国宝や重要文化財の修理に、国産漆を使用することを通知しました。この通知により、国産漆の需要が一気に高まり、国内最大の漆産地である二戸市は、政策の重点項目として対策を強化してきました。今回の特集で、市が現在抱えている課題や取り組み、「漆」で生きる人たちを紹介し、今後、漆産業が向かうべき道を探ります。

浄法寺漆を次の世代へ伝えるために

10年前は漆の在庫が貯まって全く売れない状況でした。それが平成27年の文化庁の通知から一変しました。国産漆の良さが見直され、漆が足りなくなり在庫もなくなってしまいました。今は文化財だけでも2.2ト必要だということで間に合っていないません。また、文化財以外の一般的な需要も増えてきています。これからまだまだ国産漆は必要になってきます。

生産量については、職人も増えてきているので順調に増加しています。今年も7人が研修を受けていましたので、まだまだ増えていくでしょう。



岩手県浄法寺漆生産組合

いずみやまよし さん
組合長 泉山義夫 さん

一番の課題は漆の元となる原木の確保です。今後原木が不足していくのではないかと心配しています。耕作放棄地も増えてきていますので、そういうところを活用して漆を植えていただければとも思っています。また、植えるための苗木も育てていく必要があります。また、職人育成はもちろん、他産地に負けない品質管理を徹底し生産量もまだまだ上げていかなければなりません。

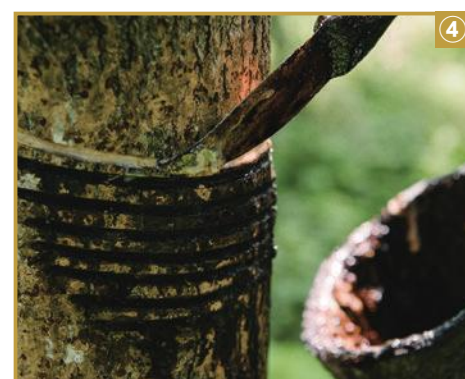
そのためにもまずは、生産組合自体でも原木の保育管理に力を入れ、原木不足への対策に取り組んでいきたいです。

職人が増え生産量も増加しましたが、新たな課題として漆原木の不足が浮き彫りになりました。年間2トの漆生産を継続していくためには18万本以上の原木が必要で、現在市で確認できている

漆原木が不足

漆は年間約650^キ。国産漆の使用通知以降、国宝や重要文化財の修理に必要な国産漆は2.2トとされ、需要に対して供給できる漆の量が大幅に不足する事態となりました。

そこで、岩手県浄法寺漆生産組合（泉山義夫組合長、以下生産組合）と日本うるし掻き技術保存会（工藤竹夫会長、以下保存会）、市が協力して職人の育成と生産量の増加に向けて乗り出しました。まず市は、地域おこし協力隊制度を活用し、これまで11人を任用しています。また保存会では、漆掻き技術を習得する研修も実施し、漆掻きについて学びやすい環境を整えました。研修の講師や協力隊の指導には熟練の職人らがあたり、知識と技術を伝授。その結果、今年度は職人数34人、生産量目標の約1.4トを達成する見込みです。



④

原木は14万2000本。これを目標本数以上にするために市は現在、さまざまな団体や企業と連携協定を結び協力を得ながら、漆林整備のため植樹に取り組んでいます。また、植樹するための漆の育苗を始めました。漆林の管理や育苗についても地元漆関係者と協力しながら進めています。

浄法寺漆のブランド化

浄法寺漆は今年、品質特性と産地を保証する特定農水産物の地理的表示（GI）登録产品となりました。浄法寺で長年育まれた技術や品質が、「浄法寺漆」というブランドとして認知されるきっかけとなりました。

かけがえのない 地域資源 浄法寺漆

浄法寺の漆の歴史

なぜ浄法寺は漆の産地となったのか。歴史は縄文時代まで遡り、遺跡から赤い漆が飾りについた、石刀が見つかっています。また、平安時代に天台寺の僧侶たちが作った器が「浄法寺塗」のルーツだと言われています。

もともと、浄法寺やその周辺地域は漆の木が豊富な土地でした。そこへ、明治時代、古くから漆掻き職人が多くいた福井県から出稼ぎにきた「越前衆」と呼ばれる職人らが、より多くの樹液を得ることができ現在も使われている「殺し掻き」（1年間掻き、最後に切り

国産漆に光明射す

倒す」という手法や道具を伝えました。しかし戦後は、生活様式の変化や安い外国産漆の増加に伴い、浄法寺漆は衰退の一途をたどりしました。

平成27年2月、漆産業にとって重要な決定が文化庁から通知されました。それは「国宝・重要文化財建造物の保存修理における漆の使用方針について、国産漆を原則として使うこと」です。生産量が減少している国産漆の保護や本来の資材・工法で修理し文化を継承していくことが目的。当初は上塗

職人数・生産量の変遷

文化庁の通知により、大きな追い風が吹く中、漆掻き職人と生産量の減少が課題として浮かび上がりました。

平成26年度、職人19人で掻いた

りの中塗りだけに限定されていましたが、平成30年には下地を含めた100%国産化を目指した決定です。

この決定により、国産漆の需要が一気に高まり、国産漆の約7割を生産する二戸市でも、政策の重点項目として、より一層力を入れて取り組むことになりました。



①日光東照宮の修復の様子／②漆掻き用のカンナで木に傷をつける／③熟練の職人から技を習う研修／④カンナで傷をつけた個所から出てくる漆を、専用のヘラでタカッポと呼ばれるタルに掻き集めす



それぞれの思いを胸に

漆人は伝統をつなぐ



元地域おこし協力隊
ながしま
長島まどか さん

自分のペースで技術を磨く

漆に興味を持ったのはテレビがきっかけでした。二戸市で研修生の募集があるということで問い合わせてみましたが満員。しかし、そこで協力隊の制度が次の年から始まることを教えてもらい応募し、協力隊として3年間活動しました。以前は広島で熊野筆を作る仕事に従事。漆も熊野筆と同じ自然の中にあるものを相手にするという点で、漆掻きになることに大きな抵抗はありませんでした。

昨年度で協力隊期間が終了

し、今年から独立して漆を掻いています。木の性質を一本一本見極めたり、天候や気温、雨の量などを見極めながら、自分で判断しなくてはいけないところが難しくもあり面白さでもあります。自分の判断が上手いと思ったら、思い通りの質と量が取れて「よし！」という気持ちになります。今後はさらに経験を積んで、どんな年でも一定の量（1本から250～300本、年間180～200本）と質で漆をとれる職人でありたいです。

漆は浄法寺が誇る第一次産業

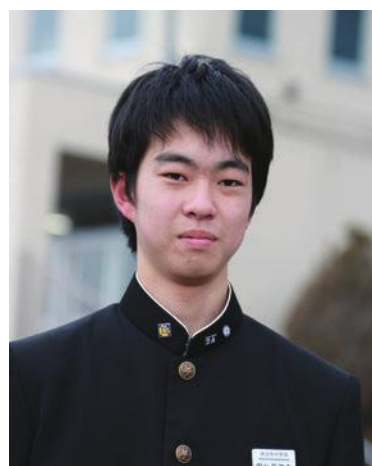
小中学校の総合学習で浄法寺漆について勉強してきました。小学6年生の時、ほほえみ工房と協力して漆の木をイメージしたパン「じゃパン」を作り販売したこともあります。市内だけでなく盛岡や東京でも販売し、多くの人に浄法寺漆をPRすることができました。

また、浄法寺漆が日光東照宮や中尊寺金色堂、鹿苑寺金閣などに使用されている事も総合学習を通して学びました。さらに、先日火災によって焼失した首里城の正殿外壁にも天然漆が使われていたことが分かりました。漆の需要はこれからも高まっていくと思います。その

国内産漆の中でも70%という圧倒的なシェアを誇る浄法寺漆が、これからさらに生産量を伸ばして行ってほしいです。

浄法寺で育った若い私たちが職人になっていけば、漆の知名度向上、生産量増加に貢献できるのだと思います。しかし、進学や就職などでふるさとを離れる人が多くいることも現実です。そのため、浄法寺を、そして漆を支えてくれている人々には心から感謝しています。

将来、自分はどんな仕事についているか分かりませんが、何か1つでも浄法寺の象徴である「漆」に関わることができればと思います。



浄法寺中2年 生徒会長
やすがひらかいと
安ヶ平海永 さん



上／「じゃパン」販売会でPRする安ヶ平さん（中央）
下／中学校では植樹を体験

撮影：植樹を進めている「漆うるわしの森」

工藤竹夫さんの弟子の1人

三上清隆さん
みかみやまきよたか



工藤竹夫さん
くどうたけお

日本うるし掻き技術保存会会長



やればやっただけ自分に返ってくる仕事

漆に興味があり、短期研修や長期研修を受けてみて、漆掻きになろうと決めました。竹夫さんからは、漆の掻き方のほか、道具の作り方や木を大事にすることなど多くのことを学んでいます。最初はわからないことだらけでした。1年研修を受けて専門用語も少しずつ覚え、最近ようやく竹夫さんが何を伝えようとしているのか、次何をすればいいのかわかってきた部分もあります。

まだまだ教わったことを100%できていません。竹夫さんの弟子の1人として、何年かかってでも質のいい漆が取れるように経験を積んでいきたいです。竹夫さんも話していましたが、質のいい漆が取れるようになれば必然と量も取れるようになると思います。

まだまだ教わったことを100%できていません。竹夫さんの弟子の1人として、何年かかってでも質のいい漆が取れるように経験を積んでいきたいです。竹夫さんも話していましたが、質のいい漆が取れるようになれば必然と量も取れるようになると思います。

木を大事にすることが技術習得の第一歩

漆掻きの指導をする際、誰に対してもまずは道具の使い方をしっかり教えます。木に傷を付ける時の切り口を滑らかにすること。これが、質のいい漆、さらに量にもつながり、木も痛みにくくなります。また、中にはなかなか上手くできない人もいます。こういう人には、できるようになるまで、何度も何度も、根気

強く教えるように心がけてきました。

私が教えるのはあくまで基本です。そこからの技術を高めるには経験を積んだ上で、自ら質問しながら覚えていくしかありません。文化財の修復で100%国産漆が使われるようになり、今まで以上に植樹も盛んになってきました。漆掻きの後継者の指導にもさらに力を入れて取り組んでいきたいです。

継承

市の取り組み

市は、漆振興のためさまざまな団体・企業と連携協定を結び、パートナーとして協力をいただきながら、漆林の整備や管理、漆の保全などの事業を進めています。

H28. 6. 1 地域おこし協力隊 2 人任用

H29. 6. 1 地域おこし協力隊 1 人任用

H29. 9. 25 (株)岩手銀行と漆の林づくりパートナー協定締結

H29.11.28 (株)事務機商事と漆の林づくりパートナー協定締結

H29.12.26 二戸ロータリークラブと漆の林づくりパートナー協定締結

H30. 2. 22 大塚製薬(株)漆振興支援自動販売機設置

H30. 4. 1 地域おこし協力隊 1 人任用

H30. 4. 26 盛岡ターミナルビル(株)と地方創生の連携に関する協定締結

H30. 6. 1 地域おこし協力隊 3 人任用

H30. 7. 26 (株)小西美術工藝社と地方創生の連携に関する協定締結

H30. 9. 5 NTT 東日本と漆の林づくりパートナー協定締結

H30.10. 5 岩手県浄法寺漆生産組合、日本うるし掻き技術保存会、(公財)日光社寺文化財保存会、(一社)社寺建造物美術保存技術協会と国指定文化財建造物保存修理による浄法寺漆振興に関する連携協定締結

H30.12.27 浄法寺漆が地理的表示(G I)に登録

R 1. 5. 1 地域おこし協力隊 3 人任用

R 1.10. 3 (公社)ゴルフ緑化促進会と漆うるわしの森づくり協定締結

R 1.11. 6 農林中央金庫、岩手県森林組合連合会、浄安森林組合との漆の林づくりパートナー協定締結

R 1.11.13 漆うるわしの森に地域の小中高生、関係団体ほか約 200 人が参加し、漆 450 本、トチノキ 200 本の苗木を植樹

R 1.11.17 漆うるわしの森に北緯 40° ナニャトヤラ連邦会議(八戸、久慈、二戸)とパートナー企業約 180 人が漆 500 本の苗木を植樹

取材を終えて

浄法寺漆に限らず、国内の漆産業は一時期衰退の一途をたどっていました。安価な外国産漆に押され、安く買いたたかれたり、売れずに在庫だけが積み重なる状況が続いていました。

そのため、必然的に職人の数も減少。それでも浄法寺が一大産地として粘り強く生きていたのは、漆が地域に根付き、原木と技術を守り受け継いできたからです。そこには、職人一人ひとりの漆に対する強い「誇り」がありました。

今「漆」には「国宝・重要文化財は100%国産漆で修理する」という、かつてない追い風が吹いています。漆掻き職人の数や原木の確保など課題は山積みですが、これまで、浄法寺漆というブランドを守り抜いてきた人たちがたくさんいました。その意思を

引き継いで、また次の世代へ伝えようと尽力している人たちもたくさんいます。

この特集で、二戸地域にはかけがえのない、世界に誇れる「宝」「資源」「人」があることを実感しました。現在市では、二戸の風土や歴史、文化を地域の物語として伝えながら「にのへの宝」を五感で体験し味わうことができる産業体験型観光「にのへ型テロワール」を進めています。その根幹の一つとして、浄法寺漆を位置付けています。また、他地域の伝統的な技術と共に、漆掻き技術・精製技術のユネスコ無形文化遺産への登録も目指しています。

世界に誇れる地域資源を守り、さらなる発展を目指すためにも、二戸市が一つとなり課題解決に取り組むことが不可欠となるでしょう。

(特集 漆伝統と文化の源泉 完)